

個性が輝く まちが輝く

とっぎゃざー

みんな 仲良く 一緒に

2022.3.第26号



よかひとりレー

- 仲田まゆみさんにインタビューしました! 2~3
- ☆中貝宗治前豊岡市長講演・女性のためのチャレンジ講座 4~5
- ☆しめ縄づくり・編集後記 6



情報誌「とっぎゃざー」は、男女ともに個性と能力が十分に発揮できる八女市を願って名付けました。

発行：八女市 人権・同和政策・男女共同参画推進課 ☎0943-23-1314
こらぼれーと*(八女市男女共同参画情報誌編集委員会)

*こらぼれーと(共同)
*情報誌を編集するメンバーのグループ名です。よろしく願います。



新型コロナウイルスによる
人権侵害をなくそう!

正確な情報に基づく、冷静な判断と正しい行動を心がけ、
新型コロナウイルスの悪影響を断ち切りましょう。



美容師
仲田 まゆみさん



—この素敵な美容室を始められたきっかけを教えてください。

結婚前から美容師として働いていたのですが、「いつか自分のお店を持つ」という夢を夫婦で持ちました。

3人目の子どもが2歳の時に、突然、夫の職場の都合で、東京へ転勤するか、退職するかを選択を迫られました。元々美容師ではない夫も、美容学校に通ってメイクアップの勉強をしていましたし、タイミングは今だ！と思い決心しました。

—お二人の夢が叶ったのですね。しかしながらまだ幼い子どもさん3人を育てながら仕事との両立は大変だったことと想像しますが、家事は、どのようにされていますか？

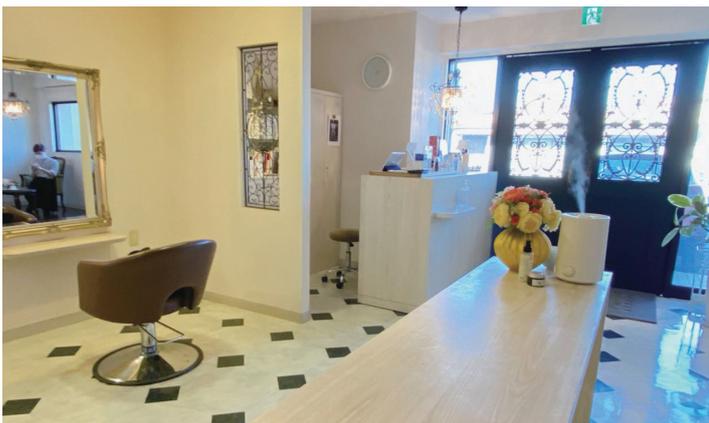
何となく一般的な家庭像として、お父さんが外へ働きに出かけ、お母さんは家事をする、というイメージがありますが、我が家は逆で、私が美容室で接客し、夫は家事をメインにやっています。但し、夫婦で話し合い、ご飯はなるべくお母さんの味でできるだけ食事の支度は私がやります。子どもはどんどん成長しますから、家族での家事分担

も当たり前のように日常化していますよ。例えば、乾燥機で乾かして帰った洗濯物を皆で畳むのは日常。自分が食べ終わった食器を洗うのも日常。という風にごくごく自然に日々行っています。家族が多い＝大変、ではなく、その分協力する手も多いので、特に苦勞に感じることはありませんよ。むしろ嬉しい事も、より数多くなり、子ども達に支えられています。

—私はこちらの美容室に約10年前からお世話になっていますが、1番思い出に残っているのは、4人目の子どもさん出産の時の事です。驚きました。

赤ちゃんが出来たと分かった時、家族皆で喜びました。出産のために約1ヶ月美容室を休業しましたが、お客様も喜んでくださり、そして休業を終えて無事再開した際にも応援下さったことに感謝しています。

4人目の育児とはいえ、1ヶ月の赤ちゃんを、日中1人でお世話するのは初めてのことで、夫は大変だったと思います。男の子3人の次に産まれた、初めての女の子は、お兄ちゃんたちにもたくさん可愛がられてスクスクと元氣よく育って6歳。この春小学生になります。



「サロンドゥ ナカタ」の店内です (八女市吉田)

——時々、ブログに登場される娘さんの姿に私も嬉しくなりますよ！

ブログには、お店の紹介だけでなく、日常の微笑ましいシーンが数々ありますね。お店の営業の都合で、ご家族のお休みが合わないという生活の中で上手にコミュニケーションをとられていて、読んでいて羨ましく思うこともしばしばですよ。

なんとなく出来たルール!?で、家族のお誕生日には、ケーキを準備して決まった場所で家族写真を撮る、ということをしています。家族6人ですから回数多いですね(笑)

私のお休みにはちよっとだけ凝ったお料理をしたり、子どもたちと外遊びをしたり、工夫次第で時間が取れるところも自営業ならではです。



——いつお会いしても、全く大変そうには見えず、柔らかな雰囲気と幸せそうな笑顔でお店に立たれているまゆみさんですが、お店と家庭の両立で特に気を遣われている事があれば教えてください。

苦労や大変さは特にありませんが、とても気を遣うのは、家族の健康管理です。だれが体調を崩しても生活に影響が出ますから、日頃の体調管理には家族で力を入れています。そのために、食に関してこだわっている点もあります。それと、何かを決める時には小さな事でも、夫とよく話すように心がけています。お互いのことを思う「思いやり合い」は大切にしたいですね。

「男女共同参画」については、改めて尋ねられると分からない



点が多いのですが、相手を気遣う気持ちを持ってお互いに行動すれば、皆が幸せな心になるかな、とは思っています。

——本当に私もそう思います。4人の子ともさんはこの春から、大学2年生・高校3年生・中学1年生・小学1年生と進学され、ますます忙しい「ママさん美容師」ですね。

はい。ありがたいことに昨年10周年を迎えることができ、感謝の気持ちが強まりました。より一層夫婦協力しながら、子育ても存分に楽しみ、20周年、30周年とお客様に愛されるお店になるよう精進したいと思っています。

——ご夫婦こだわりのインテリアに包まれたお店は、お2人の人柄が表れているかのようについ、柔らかく優しさに溢れています。

ありがとうございます。そんな風に言っていただけ私も感無量になりました。(涙目)
これからもお客様の「美」のお手伝いを楽しく元気にやっていきたいと思えます。



なぜ女性は故郷にもどらない？

豊岡市に学ぶ地方創生の道

「地方創生の必須 ジェンダーギャップの解消」

講師：前兵庫県豊岡市長 中貝宗治さん
令和4年1月29日



兵庫県豊岡市の前市長中貝宗治さんは6年前、2015年に行われた国勢調査の結果を示す数字に愕然としたと話す。大学進学などでいったん豊岡市を出た若者がどれだけ戻ってきているかを示す「地元への回復率」で男性52.2%に対して女性は26.7%でしかなかった。なぜ生まれ育った故郷に戻らない？ 豊岡市に魅力がないのか。そこから、中貝前市長の地方創生への模索が始まった。昨年まで豊岡市長を4期16年務めた中貝さんは、「ジェンダーギャップの解消」を地方創生の柱として展開している市の取り組みを、熱く語った。

豊岡市は兵庫県の北部に位置し、日本海に面している。人口約7万8千人。小説や映画などで知られる城崎（きのさき）温泉があり、コウノトリの飛来地として知られていた。ところが昭和30年代、コウノトリがいなくなった。原因は田圃への農薬使用。豊かだった自然を取り戻したいと市は1965年、人工飼育に乗り出し、89年に人工ふ化に成功、2007年には46年ぶりにコウノトリが飛び立

つ姿が見られるようになった。現在は、94羽が豊岡で舞い、全国では263羽が自由に空を飛び回っているという。

コウノトリの復活と並行して、低湿地に自生する杞柳（こりやなぎ）を生かした産業を復活させた。杞柳を織って作る柳行李（やなぎごり）は豊岡の特産品で、江戸時代は日本最大の産地だった。この産業を掘り起こし、今では持ち手を付けたカバンの有名な産地として知られている。

中貝前市長は自然と共生する道を選んだ市民の取り組みを背景に「小さな世界都市」を目指した様々な取り組みを推進してきたが、市長3期目の国勢調査で「豊岡の女性は都会に出たら4分の1しか戻ってきていない」という数字に驚いたと言った。女性が男性の半分しか帰ってきていないということ、結果として豊岡に男性の結婚相手がいけない、家庭を持っていない、子供が生まれえない、必然的に豊岡の人口が減少するという負の連鎖に陥っていることか。なぜ女性は帰って来ないのか。そもそも、男性でも半分しか帰っていない。若

い男女が、豊岡に帰ろうとする魅力を感じないのはなぜか。

ある日、退職を前にした女性の部長が、市長に話したのは「（女の私が）課長補佐になることなど、夢のまた夢だと思っていました」という、市役所が男性中心社会だったという回顧談。市長として職員人事などにも目配りし、男女間の差が生まれないようにと気を配っていたつもりだったが、調べてみると差が生じていた。

市職員の男女別年齢構成では、男女比、年齢構成ともバランスを欠いていた。40歳以上では男性職員が75.7%で、女性は24.3%。しかも女性職員の多くが、庶務や窓口などの職場で仕事をしている。四十代で勤務22年の女性は住民サービス、窓口での勤務が4分の3に及び、仕事内容もほぼ固定状態。同じく四十代の男性は住民サービス、庶務、企画・調査、財務・経理、施設運営など多くの職場経験があった。人事異動で、性別による職務配置を行ってきた可能性が浮き彫りになった。多様な経験が少ないことが、女性の自信のなさに強く影響を及ぼしている、と考えさせられたという。

中貝前市長は「進学などで故郷を離れている若い女性は、帰らないうという判断をするだけでよい。全国どこでも、若い女性たちがスーッといなくなった。これは、女性たちの『静かな反乱』だ」と振り返る。自然を守る取り組みを行い、文化・芸術の街づくりも進めてきたが、豊岡市には都会以上魅力はなく、真の男女平等は実

現されていないと、若い女性を感じているのではないか。こうした女性たちが戻るといいと判断できる魅力ある場所にするためには、「豊岡市のジェンダーギャップ（男女間格差）を解消する」以外にはないという結論に至った。

こうした判断のもと、市は昨年3月、「豊岡市ジェンダーギャップ解消戦略」を立てた。若い女性に「暮らしの場として選ばれていない」のは①豊岡市が男性中心の社会で、社会的・経済的な分野で女性が補助的な役割を担ってきた②大都市、大企業では女性の採用や定着率が向上し、ダイバーシティ（多様性）の取り組みが進んでいる③ジェンダーギャップの解消が進む世界の状況がよりはっきりみえてきたこと、豊岡に暮らす価値」が相対的に低下したと分析。次世代に、豊岡市を持続可能なまちとして引き継ぐため「過去や現在を否定することではなく、よりよい未来を引き継ぐための取り組みである」とうたっている。

中貝前市長は、「女、子どもは黙っている」という文化のところ、女性、若者は帰って来ない。これから目指すものは男女に格差のない社会、地域。私たちのまちが、女性に対して女性であるというだけで、女性に様々なものの断念を迫ってきたのだとすると、それは公正さ（フェアネス）と『いのちへの共感』に欠ける状態であったと言わざるをえませんと「反省を交え、説明した。同戦略では、事業所、組織にも

働きかけを行っている。事業所を対象とした経営者実践セミナー、人事担当者セミナー、女性従業員リーダーシッププログラムの作成、地域コミュニティ組織（旧公民館単位）のリーダー研修、幼稚園・保育園などを対象にした教諭・保育士研修などを次々と展開。家庭内の男性のありようにも踏みこみ、家事、育児、介護のスキルは男性にとっても生活自立に不可欠との判断から、ジェンダーギャップの存在は、女性のみならず男性の自立を阻害していること、男性の自覚を促している。

中貝前市長は市長退任後、豊岡アートアクション理事長に就任し、平田オリザさんを館長に招いた劇場運営などにかかわり、様々な場所でジェンダーギャップ解消に向けた市の取り組みを語っている。

「女性も男性も、社会的・経済的な夢を持ち、悔いのない人生を送りたいと願う生身の人間であるという前提に立って、互いに尊重し、支えあう社会を築き上げようとする未来に向けた取り組みです。私も最近、家で炊事の場に立つことも多くなりました。市長時代に、中学校と高校の家庭科の教科書に『自立と共生は表裏一体』という言葉があることに気づき、こういう理念で学ぶ子供たちが、日本の社会を変える原動力になるとうれしく思った」と、将来への希望を語った。

女性のためのチャレンジ講座

「輝く女性のための 趣味と生活と仕事に役立つ

ライブ配信&動画編集講座（全4回）

於：おりなす八女

令和3年12月9日～12月21日

女性が自分に自信を持ち、新しい分野への挑戦や、ステップアップを目指すことを目的として講座が開催されました。4回の連続講座に、30～80歳代までの女性24人が参加し、ライン、ユーチューブ、インスタグラムによる動画配信を目指して、スマホの基礎知識、動画編集、動画配信を学びました。2時間の講座の前後の補講にも参加するほどの意欲満々の受講生で、講座の中で作ったグループラインには、その日に学んだ編集技術を使った動画が次々とアップされ、夜中までラインが鳴りやまず、寝不足になるのではと心配されるほどでした。講座終了後もラインでの情報交換は継続中で、挑戦だけでなく素敵な出会いが生まれたようです。講師の末廣修一さん（インターネット家庭教師代表）は仕事と家事・介護を両立し、男女共同参画を実践している方です。特に料理の腕には自信があるそうです。



受講生の感想とこれからの抱負

インスタやフェイスブック、ラインを使って手作りのお菓子の紹介と販売につなげていきたい。

早速友人に写真の編集をして送りました。フェイスブックのピアニ演奏動画の編集ができるようになりたい。

動画編集を極めて、ユーチューブでチャンネルを持てれば仕事に活かせる。

両親の人生動画を作れるようになりたい。お葬式で配信。

子どもの野球や思い出の写真を集めてみんなに喜んでもらいたい。

職場のオンラインオープンキャンパスなどの動画作成に役立てたい。

子どもと一緒に動画の編集にチャレンジ。目指せユーチューバー。

やったことのなかった動画編集。とても面白く手が止まらなかつた。チャレンジすることの楽しさを学んだ。



しめ縄づくりと山口先生

令和3年12月5日
たちばな男女まちづくり委員会

八女市立花町の担い手研修センターで、たちばな男女まちづくり委員会主催のしめ縄づくりがあり、指導者の山口久幸さんからしめ縄としめ飾りについて話を聞きました。

山口さんは小学校校長を定年退職後、矢部村中央公民館長を経て現在八女市文化財専門委員を務めておられます。



しめ縄づくりは北山小学校（現筑南小学校）校長時代に児童らと共に、体験学習の一環として始めたのがきっかけだそうです。

しめ飾りは、田の神様が降りてきて豊かに稔ったそのわらで作り、神様への感謝の気持ちと新しい年への無病息災の願いを込めて玄関に飾ります。

神様はしめ飾りを飾った家に降りてきて願いを聞き入れ、どんど焼きの時に一緒に燃やすしめ飾りの炎と一緒に戻って行かれるとのことでした。

一般にしめ縄と呼びますが神社等の門に飾った大縄をしめ縄と呼び、家庭の玄関等に飾る扇状の飾りをしめ飾りと呼ぶとのことでした。

まだまだ神事等で根拠のない女人禁制等が残る中で、たちばな男女まちづくり委員会では老若男女によびかけ、10年ほど前からしめ縄づくりを開催しています。



編集後記

LGBTについて何となくわかってはいるつもりだが、身近にそういう人がいることを知るともっと理解しようという気持ちになる。

一瞬はハッと思ってしまった、病気でもないのに何でそうなるの。話を聞いても理解に苦しむことの方が多いのではと思う。でも頭から否定するのではなく耳を傾ける。

最近色々なケースをテレビなどで見聞きし、悩み、困っておられることを見ると大変だなと理解も深まる。他人事ではなくって来ているのだと、拒否しないで話を聞きたいと思う。

申請書等の男女記載欄も段々と外されて来ている、少しずつ社会に認識されているのではないだろうか。

しかし、認識と理解は別物。知っていても理解しなければ、LGBTの人は社会生活に不安が付きまとう。女性問題も、LGBTも同じ人権問題。一緒に考えていきたいらと切に願う。

井上真由美